韓国盲僧の語り

――シンポジウム1・物語以前――

永井彰子

はじめに――問題の設定

『高麗史』や『朝鮮王朝実録』には、占卜と読経を職能として国家的祈雨・救病などの宗教儀礼に携わる盲人が登場する。彼らは盲僧、瞽者、盲卜、売卜盲人、命課盲人などさまざまな呼称であらわれる。このような盲人たちは李朝時代には明通寺、のちには盲庁を拠点にして集団を形成し、国家の援助を受け祈禳・祝言を行った。その系譜は、大韓盲人易理大承教（一九二五年設立）を経て、現在の大韓盲人易理学会（一九七〇年設立）が継承している。今日では盲人読経師という呼称が一般的であるが、歴史的にみて、占卜と読経に携わる盲人宗教者を盲僧の名で一括することは可能だと考えられるので、大韓盲人易理学会会員を韓国における盲僧として規定する。

このような盲僧については、これまで韓国内でも研究対象として注目されてこなかった。そのため研究成果も、主に巫俗研究の一環として盲覡（パンス）の個人的な宗教活動や、道教史・盲人職業史という側面に限られている。したがって業績が蓄積されているとはいいがたいが、それでも研究を進展させてきたのは、孫晋泰、李能和、村山智順、赤松智城、秋葉隆、車柱環、林安秀など諸氏である。

孫晋泰氏は「盲覡考」[註1]の中で呪術宗教的機能を持つ盲覡の歴史と社会的機能について論述する一方、最初に巫歌資料を収集した。李能和氏は『朝鮮道教史』[註2]を著わし、道教と盲人の関係について、盲僧が道教の道流僧であることを指摘し、盲僧に関する基本的な文献資料を提示した。また、村山智順氏は『朝鮮の占卜と予言』[註3]など調査資料を出版したが、調査方法に難点があるものの、現在では貴重な資料価値を持っている。秋葉隆氏は赤松智城氏と共に韓国全域を調査して『朝鮮巫俗の研究』上・下巻を刊行し[註4]、さらに『朝鮮巫俗の現地研究』[註5]においてそれを補正した。氏は盲覡を歌舞賽神を行うムダンと同じシャーマンの概念に含めて考察した。車柱環氏は『朝鮮の道教』[註6]の中で、道士の代わりに雑術を担ったのが盲僧であり、売卜読経する事例は朝鮮にのみあるとしている。林安秀氏は学位請

求論文『韓国盲人職業史研究』(註7)に続いて「盲人の歴史」(註8)を発表し、占卜や管弦、按摩・鍼治など、盲人の職業と身分の変遷について明らかにし、社会史的立場から画期的な研究を続けている。

本稿ではこのような先学の業績に依拠しながら、盲僧の宗教活動のうち、特に唱導面に焦点をあて、今回は口承で伝えてきた伝承および経文類とプリについて取りあげ、紹介することにしたい。

1　調査方法

盲僧研究の際に留意されるのは、盲僧は自分自身の手になる史料を残さなかったことである。晴眼者の手を経なければならないという限界があることを考慮する必要があるだろう。そのため史料調査とともに、文献史料にあらわれにくい口頭伝承を探るべく面談調査をあわせて行った。大韓盲人易理学会は全国的組織であり、一九九六年現在、総会員数は二一一七名を数えている。調査は一九八八年より始め、まだ継続中であるが、一九九八年八月現在、ソウル本部をはじめ、九支部（釜山、大邱、京畿、忠北、忠南、全北、慶北、慶南、江原各道）所在地を中心とする一三カ所の地域で行った。(註9)面談調査は本稿の目的に照らし合わせて、指導的役割を果たしている支部役員や、読経師としての経験が長く、読経・占卜についての知識が豊富であり、正確な情報を提供してくれることが期待できる会員二七名を対象に実施した。その結果、会員たちが多様な伝承を持ち伝えていることが明らかになった。なかでも、例えばソウルのA師のように、名卜譚や民譚類を多く伝える優れたストーリーテラーもいた。

A師は一九四〇年生まれ、忠北道忠州出身で七歳の時失明した。書堂で一一歳から周易を学び、一六歳から盲人読経師のもとに住み込んで読経や漢字を習得した。二六歳でソウルに出て以来、三〇年以上にわたって大韓盲人易理学会ソウル本部で弟子の養成にあたってきた。(註10)A師が持ち伝えるはなしのほとんどは、師匠や先輩、または盲僧同士の関係から個人的に口から耳へと口承レベルで伝達されて得たものである。それは長い時間をかけて繰り返し語られることによって、盲僧たちが共有する集合的記憶となったものである。その中から盲人読経・盲人集団の起源伝承を取りあげよう。

なお、面談調査の際、盲僧は「語る」という場合に、韓国語のイクタ（読むの意）を使用している。それゆえに本稿ではあえてカタカナで「ヨム」と表記することにする。

2　盲人読経・盲人集団の起源伝承

まず、現在までの面談調査の結果と、先学によって収集された事例をあわせて資料1にまとめておく。この資料から注目される点を次に摘記しよう。

1　①②③④および⑤⑥の伝承は、細部に違いがあるもののそれぞれ同系統とみられる。

2　①②については、李朝時代の盲人庁、盲庁の設立に関する伝

承である。大韓盲人易理学会の歴史的起源として口頭で語り継がれ、集団全体をカバーする伝承ではないが、特にソウル地方の会員の間で共通に認識されている。それはもともと大韓盲人易理大承教がソウル・京畿道の会員を中心に組織されたからであり、自らの存在を基礎づける神話としての機能を果たすものと考えられる。

3　①から⑥までのすべてが王権との直接的な関係を強調している。李朝時代には命課盲人制度のもと、一部の盲僧は国卜を担当し、王朝との密接な関係が持続した。このような歴史的経緯が投影されている。(註11)

4　⑤⑥の伝承を理解するうえで知っておくべきは、盲僧は宗教者として巫女（ムダン）とは近接関係にあるが職業的なライバルであることである。⑤⑥の伝承は、ムダンより盲僧による読経の効験が優れていることを、社会的に認知させるために組織された語りである。そもそもムダンの職能としては、周知のように、司祭、治病、占卜などがあげられるが、芸能的側面もあわせもっている。すなわち儀礼の中で歌舞を行い、トランス状態のような意識の変性状態に入り賽神（クッ）を執り行うこともある。(註12) これに対して盲僧の場合は読経と占卜を職能とする。したがって、治病のためには、読経によって鬼神を追い払う逐鬼儀礼を行うが、この際でも盲僧自身がトランス状態を示すことはない。(註13) かつて李能和氏は両者の性格について「賽鬼以祈穰者巫堂之事也、読経而駆逐者盲人之業也」(註14)として区別したのは、まさに正当であった。

しかしながら盲僧が携わる儀礼は、シャーマニズムを信奉するムダンの行う巫儀と信仰体系が異なっており、一般的に両者は反発し合う関係にあるが、地方によっては、清州地域の場合のようにムダンと盲僧が共同で同一の儀礼を行う場合も存在する。(註15)

5　語り手によって伝承の細部に多様性がみられるが、核心部分はそのまま維持されている。②③の伝承では、父王の名は変化しても主人公である桂山大君の名は固有名詞として共通する。管見の限りでは、この名が「璿源系譜」(註16)上に記録されていないことからみて実在した王子ではないと思われる。重要なのは、盲僧集団の起源が桂山大君という権威に結びつけて語られることである。それは自らの権威を高めるとともに、集団の成員の結束を強化する機能を果たしている。盲僧は一般社会とは別に盲僧独自の世界を作り上げたが、そこで必要としたのは成員統合の中心をなすにふさわしい起源神話であった。

以上、注目される点を挙げてきたが、この中で特に興味深いのは王子を始祖とする伝承である。これに関して想起されるのは、日本の座頭集団である当道座の祖神を「天夜の尊」や「小宮太子」とする伝承であろう。例えば当道の伝書や式目類の多くは「天夜の尊」を光孝天皇の皇子としている。盲目である尊のために父帝は盲人を選び集めて御伽をさせ、下賜された御家領の貢米を盲人たちに配分し、のちには官位を与え、これを当道の配当や官職の起源とする伝

承である。(註17)

さらに付け加えるならば、この伝承に先立つ原形として考えられているのが蟬丸を始祖とする伝承である。一二世紀初頭に成立した『今昔物語集』には、蟬丸の名は「賤シキ者」ながら、琵琶を弾く盲人芸能者たちの始祖として語られている。(註18) それが一三世紀に入ると醍醐天皇の皇子と目されるようになり、『平家物語』の中では、琵琶の秘曲を伝える「延喜の第四の宮」として蟬丸の姿が描かれるのである。(註19) また、この蟬丸にまつわる伝承は九州の盲僧集団の間にも流布していた。このことは、中世末あるいは近世の盲僧座の拠点であった筑後高良玉垂宮や、肥前櫛田宮金剛院が保持する縁起書や遺跡が、蟬丸にまつわる伝承を伝えていることから推測しうるのである。(註20)

このような盲僧集団の起源に関する日韓の伝承を比較してみると、それぞれが皇子を始祖としている点において共通している。これは単なる偶然の一致に過ぎないのであろうか。この点についての検討は、残念ながら他の機会に譲ることにしたい。

以上によって盲人読経・盲人集団の起源伝承についての考察を終えるが、このような起源伝承を口承でなく、点字版による書承で享受する事例も見出されることにも留意しておきたい。一九九三年韓国盲人福祉聯合会は『盲人の教育と福祉』と題する報告書を刊行したが、その中で「占卜業」の項を担当したのがA師であった。(註21) A師は「盲人庁の設立と運営」の中でこれまで口承で伝えてきた起源伝承を初めて点字化した。こうして書承化された起源伝承はさらに韓国盲人福祉聯合会や大韓盲人易理学会の機関誌などに転載され、全国の会員の間に広く流布し、浸透していった。これは一九九八年に実施した面談調査の結果、明らかになったことである。その際、馬山のX師は桂山大君にまつわる起源伝承について語ってくれたが、この伝承を誰から聞きましたかという質問に対して、それは盲人仲間から聞いたのではなく、ソウルの韓国盲人福祉聯合会が発行した機関誌を読んで知り得た、と証言している。また、最近発行された大韓盲人易理学会の機関誌『同行』(一九九八年五・六月号)においてもA師が書承化した起源伝承を取りあげ紹介している。これも盲僧たちが点字版による書承で享受していることを示す事例の一つである。

さて、このように見てくると、現在盲僧たちが語る起源伝承には複数のパターンがあることに気付かされるのである。すなわち、一つは口頭のみで伝承されてきたパターンであり、二つ目は書承化されたものをそのまま語るものである。三つ目は書承化されたテキストをベースに、さらに盲僧自身が自分なりに口承化するパターンである。いずれにせよ、盲僧の語りは晴眼者の場合と同様に、口承と書承との狭間を揺れ動きながら伝えてきたことが理解されよう。

3　経文類(真言・篇・陀羅尼・偈・祝文・念仏)

前章で述べてきたような口承から書承へ、書承から口承へという相互作用は、何も現代の盲僧集団でのみ生じたことではなく、また

希有なことでもない。そのことを盲僧集団が伝えてきた経文類を例に取りあげ、次に傍証してみよう。

盲僧は多くの経文類を口頭で伝承してきたが、それらがある時期に晴眼者の手によって活字化されたものがある。(註22)

一九九七年に調査を実施したおり、筆者は慶北道慶州経ト組合長であった金大震師が中心となって刊行した版本『仏宝遺集』(註23)をV師から入手した。この経本は今のところ2本しか現存せず、他の1本は大韓盲人易理学会ソウル本部が所蔵している。それまで慶州地方の盲僧がそれぞれ口伝で伝えてきた経文類を編集したもので、経本の上段に漢文、下段に諺文（ハングル）で経文を併記している。口承段階で伝えてきた経文は収集してみると一様ではなく、整理する必要が生じたのであろう。『仏宝遺集』の趣旨書には、経文が難解なため、師より口伝心受するのは千辛万苦であること、経文の支流が多く、口読不同、同音異口であることを挙げ、経ト組合員が相談の上、修正・整理にあたったことを記している。それまで盲僧が口承で伝えてきた経文類は『仏宝遺集』として統一され、テキスト化されたのである。刊行にあたっては、晴眼者が関与したことは言うまでもない。

ところで、V師は一九三七年生まれ、四歳の時失明し、八歳から晴眼の父に自宅で読経の方法や経文類を伝授されたという。その際、父がテキストとして音読したのがこの『仏宝遺集』であり、それを少しずつ暗誦する形で経文を習得していったという。このようにいったん統一され、テキスト化された経文類は再び口承の世界へと立ち戻っていったのである。これは何もV師の場合のみに限るものではない。

確かに現存する『仏宝遺集』は2本しかないのであるが、印刷された以上、相当部数が広く流布していったと考えても不自然ではない。そうであれば、多くの盲僧たちも同様に、書承化された経文類を伝授され、それを習得することによって新たに口承化していったと推測するのは容易なことであろう。

さて、『仏宝遺集』には三三種類の経文が収められている。これを厳密に仏教と道教といずれに属するか判定するのは困難であるが、仮にこれらを仏教的経文、道教的経文、その他混合的経文と3分類してみると、次の通りになる。この分類をふまえて経文の特徴を指摘すれば、下記に摘記する通りである。

〔経文の分類〕

仏教的経文――千手経、仏説竈王経、仏説歓喜竈王経、仏説安宅神呪経、仏説天地八陽神呪経、仏説世尊歓喜経、仏説高王観世音経、仏説夢授経、般若心経、仏説童子続命経、仏説童子延命経、仏説広本太歳神王経、仏説龍王三昧経、仏説山王経、仏説眼目清浄経、仏説金神七殺経、仏説度厄経、

道教的経文――（玉枢経）(註24)、天心経、太上玄霊北斗本命延生真経、太聖北斗延命経

その他混合的経文――道場経、不浄経、木神経、堺窟経、明堂神呪経、消除横殺経、成造歓喜経、三神帝王経、夫婦和合経、地神経、当山経、牛馬長生経

〔経文の特徴〕

①『仏宝遺集』に記載された経文名やヨミ方には地域性が認められる。

②「仏説……」と銘打っても必ずしも内容は仏経ばかりではなく、混合的経文も含まれている。また、「仏説……」とつかなくても仏・菩薩・如来などの仏教神に関する要素を含んでいる。

③その他混合的経文には、陰陽五行・六甲八卦や七星神など巫俗の民間信仰的要素が加味されている。

④経文といっても、経名や神格（将軍、神将、元帥、軍神、星君、真君）の反復や羅列が多い。

⑤読経の主な目的は、鬼神を威嚇して捉え、追い払うことにある。そのために神将・神兵の結陣を促そうとして、「八陣図」や「八門大蔵経」「奇門経」をヨム場合もある。これらは諸葛孔明に仮託した「奇門遁甲」に由来するものであろう。(註25)

⑥読経の際には、プクとクェンガリを楽器として用いる。(註26)

これらの経文の他に、実際の儀礼では、真言など多様な経文類をヨム。例えば家屋全般を司る守護神である成造神に対しては、「成造前致誠誦経法」として、最初に道場経、次に準提篇、開壇・建壇・浄法界・普召請の真言、成造祝文、変食・普供養・普回向・所願成就補闕の真言、成造歓喜経、明堂神呪経、仏説安宅神呪経、仏説度厄経、三災経、仏説天地八陽神呪経序文、消除横殺経の諸経をヨム。この儀礼で特に重要な成造祝文と成造歓喜経を資料2にあげておく。

4　プリと神話

前章でみたように、盲僧は多くの経文類を口承と書承で伝えてきたが、これらの経文を誰もが理解できるように、漢文成句ではなく日常用語を用い、解釈して語るプリをも伝承してきた。

プリとは、一般的にムダンが巫俗儀礼の中で唱える巫歌を指している。解く、解釈する、厄を払うという意味の朝鮮語プルダの名詞形であり、神歌、讃歌、寿詞などとも訳されている。ムダンはプリの中で天地創造や建国の歴史、神の来歴譚や儀礼の由来などを詠唱して神の来臨を乞い、祈願するのである。このようにムダンはプリの伝承者と考えられ、プリは従来、巫女のみが唱えるものとされてきた。(註27)

ところが今回の調査によって、盲僧集団もまた、プリを口誦している事例を見出すことができた。それをU師とW師の場合を例にみてゆくことにしよう。

慶北道慶州のU師は一九二〇年生まれ、三歳で失明し、六歳の時から占卜と読経を習った。一一歳で読経の仕事を始め、そのかたわらソウルの盲学校で按摩と鍼の技術を習得した。また一五歳から四年間、大邱の仏門で学んでいる。

一方、慶南道馬山のW師は一九二八年生まれ、八歳で失明し、一二歳の時から占卜と読経を習得し、一九歳で独立した。以来、馬山を中心に活動している。

U師とW師は親しい交友関係にあるわけではなく、同じ慶尚道ではあるが活動する地域も、また師匠も異なっている。だが、プリについての説明は大体一致している。

両師によれば、プリとは経の内容を解釈し、日常的な口語体で物語のようにヨムものだという。経にくらべて内容はわかりやすく、聴衆をひきつけたるために面白く語ったり、おかしなエピソードを入れたりして工夫する。したがって経文のように、漢文を覚えてそのまま暗誦すればよいというわけでなく、語り手や聞き手によって面白さも変わってくる。また両師によれば、プリにはそれぞれ決まったストーリーがあるので、それに沿ってさえいれば、どう語るかは語り手の裁量にまかされている。そのため人によってプリのヨミ方もリズムも違う。経と違って、プリは正式なものではないので、その場に合わせ、臨機応変に短くしたり長くしたり自由である。普通楽器は太鼓やクェンガリを用いるが、仏堂ではモクタク、ヨリョンを用いている。

U師によれば、経を覚えきれない盲僧がその代用としてプリをヨム場合もあったという。昔は経典を勉強したくてもできなかったので、模倣しながら解釈（プリ）し、経文に代えていた。つまりプリをヨムというのは、むしろ無学の証のようなものだとされていたという。U師が記憶しているプリの種類には次のようなものがある。

［プリの種類］

成造プリ――家屋を建てた時に使うプリ

不浄プリ――雑鬼を追い払う

竈王プリ――台所で語る

世尊プリ――仏のためのプリ、パルサン録をプリ（解読）したものの、現在は使わない

祖上プリ――先祖におくるプリ

施食プリ――餓鬼となった死人の魂を腹いっぱい食べさせておくる時に語るプリ

逐邪プリ――鬼神を追い払う

解寃プリ――種々の鬼神たちの恨をといてやるプリ

三神プリ――赤ん坊が母親の胎内にいる過程をストーリーに沿って唱え、無事生まれるように祈る

ソンプリ――天然痘のような伝染病を治す時

次にこの中から成造プリを取りあげてみよう。念のために言えば、U師とW師はほぼ同じ内容の成造プリを伝えている。二〇年位前までは、家屋を新築するとどの家にも盲僧を呼び、成造神を迎え入れ、奉安するために成造プリをヨムのが恒例であった。なぜならば、成造プリが成造神の来歴を語る叙事巫歌であり、儀礼のたびに盲僧の声を通して聴衆はその神話を知識として体験するからである。

一九九七年の調査では、成造プリのあらましについてW師の実際の語りを採録することができた。これは神仏の申し子である安心国が予言通り無人島に流され、苦難を経て本国に戻り、最後は成造神として示現するというテーマであり、一種の貴種流離譚である。成造神の来歴を解くことによってその場に神の来臨を乞い、家庭の安泰や家族の健康を願うものである。W師によれば、基本的ストー

リーは変わらないが、語り手が一定の枠組みの範囲内で自由に構成するので、本格的にヨムと一時間半位の時間を要する長いものとなる。

ところでW師の語る成造プリとほぼ同様な内容のプリは、孫晋泰氏が一九二五年に、崔順道師の語った「成造神歌」を紹介したことがある。(註28) この「成造神歌」の原文は、孫晋泰氏の求めに応じ、崔師が口誦した「成造神歌」を崔師の知人が筆録したものである。それは「とてつもない漢文で、でたらめな修辞を施したところが多く、翻訳にはひどく困惑したが大体は忠実に訳した」という。それによると崔師の「成造神歌」は「家神由来歌」の副題がつけられ、一三段で構成されている。それがどのようなものか知るために、最初の一段目に限り孫氏の翻訳文を資料3にあげておこう。

次に、一九二五年に崔師が語った「成造神歌」と、それから七〇年余りを経てW師が語った成造プリを比較してみよう。W師の語りは簡略化されたり、欠落した部分はあるにしても、「成造神歌」とほぼ同じストーリーを伝えている。

もっともW師はすでに成造プリの全体を語る能力に欠けている。それは一つにはW師自身の老齢化であり、また成造プリを語る機会に恵まれてこなかったからである。

ところが崔師の語る「成造神歌」は前述のように、一三段で構成されていることが明らかである。つまりW師の語る成造プリは、もともと一三段で構成されていた可能性があり、そしてもはやW師は語ることができないとしても、そのかつての姿は崔師の語る「成造神歌」でほぼそれを復元できるのではないだろうか。そこでストーリーの全体を知るために成造プリを要約し、欠落した部分を「成造神歌」で補い資料4として示しておこう。

さて、成造プリは経文とどのように違うのだろうか。資料2に示した成造祝文と成造歓喜経の二つの経文と比較してみるのも意義あることであろう。この二つの経文と成造プリの内容を一見してわかるのは、プリの物語性や娯楽性が歴然としており、聴衆が興味を持つように、具体的な安心国の説話を示して説明する形をとっていることである。聴衆を引き込むにはすぐれた語りや声の力が必要となり、これは声のパフォーマンスの世界ともいうべきであろう。顧客としての聴衆が娯楽的な関心から期待するのは、内容の面白さや巧みな語りではないだろうか。

このほかにU師が記憶しているプリには含まれないが、盲僧が神話を語った事例を付け加えておこう。張徳順・徐大錫両氏は、一九六八年京畿道の金用植師の語る「帝釈本プリ」を採録している。(註29) これはタンメギタリョンともいい、全国的に分布しているムダンが詠唱する「帝釈本プリ」と同じ系列とみられる。タンメギが一人留守番をしている時、布施のため訪れた釈迦如来と出会い、一夜を過ごすが妊娠してしまう。両親のもとを追い出されたタンメギは息子三人を生む。息子たちは人間の寿・福を管掌する神になったというストーリーである。

以上のことから、盲僧は読経儀礼にとどまらず、ムダンと同様にプリの伝承者であることを確認しておきたい。

おわりに

口承で伝えてきた起源伝承や経文・プリがある時期に書承化（点字など）されることによって共通した知識となり、それがまた口承の世界へとさらに拡散してゆく過程を韓国盲僧の語りの事例からみてきた。盲僧の語りは盲人であるがゆえに口承でのみ伝達され、書承とは無縁であるかのように考えられがちであるが、語りと文字とが相互に交錯していたことは以上のことから明らかである。

古来、朝鮮半島では上元（正月一五日）の前日から、盲人が安宅経をヨミ、厄を払い、福を祈る行事が盛んに行われていた。(註30) 宗教儀礼の上で盲僧が果たしてきたこのような読経の役割が次第に後退し、占トが中心となってきたのが現状である。韓国における民俗社会の変質や生活様式の変化によって盲僧集団も変質を余儀なくされてきた。点字の普及やコンピューター機器の発達で盲僧自身の表現手段も多様化し、かつて無かった状況に直面している。今日、視覚障害者が接する世界も、例えばインターネットの文字情報を音声に変換し、あるいは点字情報に変換するソフトが開発されて飛躍的に拡がっている。盲僧の語りは今後どのような形で受け継がれ伝承されていくのだろうか。

豊かな語りの世界の一翼を担ってきた韓国盲僧の口頭伝承については、名ト譚や民譚、隠語など、まだ未開拓の分野が多く残されている。それがどのように語られたか、語りの場に即して考察することも必要になってくる。それらを次の課題としたい。

【註】

(1)「盲覡考」（『朝鮮民族文化の研究』三四一～三五六頁、乙酉文化社、一九四八年）。

(2)『朝鮮道教史』普成文化社、一九八一年。

(3)『朝鮮の占トと予言』朝鮮総督府、一九三三年。

(4)『朝鮮巫俗の研究』上・下巻、大阪屋号書店、一九三七年（民俗苑、一九九二年復刻）。

(5)『朝鮮巫俗の現地研究』養徳社、一九五〇年（名著出版、一九八〇年復刻）。

(6) 三浦国雄・野崎充彦訳『朝鮮の道教』七九頁、人文書院、一九九〇年（原著『韓国の道教思想』同和出版公社、一九八四年）。

(7)『韓国盲人職業史研究』視覚障碍者教育研究一―一、檀国大学校出版部、一九八七年。

(8)「盲人の歴史」（『盲人の教育と福祉』九三～一一九頁、韓国盲人福祉聯合会、一九九三年）。

(9) 調査を実施したのはソウル市、釜山市、大邱市、議政府市、清州市、泰安市、安眠島、全州市、浦項市、慶州市、甘浦、馬山市、原州市の一三カ所である。

(10) A師は大韓盲人易理学会の学術理事を勤めていた。一九九八年三月、新設された社会福祉法人「大韓盲人福祉会」内に同学会が併設されたのちも、引き続いて易学教育に携わっている。

(11)『経国大典』に定められた命課盲人制度は、一六三六年丙子胡乱直後に廃止されたが、一六六九年以前に復活し、国末まで存続した。命課盲人は従九品の下級の雑職であり、国家の重要な行事の際に国卜を担当した（林安秀『韓国盲人職業史研究』四七～五〇頁）。

(12) 崔吉城著、福留範昭訳『韓国のシャーマン』四七～八六頁、国文社、一九八四年。

(13) 一九九七年八月、原州市のY師宅の神堂で行った逐鬼儀礼を見学したことがある。Y師は座したままで太鼓を打ち、神将デに神将を降臨させ、鬼神を捕えるべく二時間読経し続けた。

(14) 李能和「盲人読経業」（『朝鮮道教史』四六二頁、普成文化社、一九八一年）。

(15) 清州市のM師は、口外できないことだと前置きした上で、清州地域ではムダンとともに別神クッなどの巫祭に携わることを証言している（面談調査、一九九七・八・一八）。

(16)『韓国史〔年表〕』附録、乙酉文化社、一九五九年。

(17)「当道要抄」（「翻刻『当道要集（要抄）』三種」調査研究報告七号、国文学研究資料館文献資料部、一九八六年）。当道座の祖神伝承の流動・統合については、兵藤裕己氏が「当道祖神伝承考（上）・（下）―中世的諸職と芸能―」（『文学』一九八八年八月・一九八八年九月）において詳細に論究されており、示唆的である。

(18)「源博雅朝臣、行会坂盲許語 第二十三」（『今昔物語集』四、三一二～三一四頁、日本古典文学大系二五、岩波書店、一九六二年）には「其ヨリ後、盲琵琶ハ世ニ始ル也トナム語リ伝ヘタルトヤ」とある。

(19)「巻第十、海道下」（『平家物語』下、二五八頁、日本古典文学大系三三、岩波書店、一九六〇年）には「延喜第四の王子蟬丸の関の嵐に心をすまし」とある。

(20) 拙稿「解説」『福岡県史 文化史料編 盲僧・座頭』四九八～五〇三頁、五六八頁、一九九三年。

(21)『盲人の教育と福祉』の中では、鍼・マッサージとともに占卜業が盲人の職業としてあげられており、A師は易学の意義や変遷、韓国盲人の占卜術由来や発展、大韓盲人易理学会の成立について述べている。

(22) 一例をあげれば、赤松智城氏が江原道原州の男覡、李世栄伝承の巫経「鑠邪大全第一・二巻」（写本）を紹介している（『朝鮮巫俗の研究』下巻附録、一～八二頁、大阪屋号書店、一九三七年）。

(23)『仏宝遺集』は一九三六年の刊行、寸法縦二七センチ、横一八・五センチ、朝鮮本綴、袋綴で七眼針、本文は一〇八丁、表紙は茶色、韓紙使用。「道場清浄誦経法」「竈王前致誠誦経法」など一三種の誦経法が示され、使用する経文類をあげている。V師はムダンに渡さないことを条件に『仏宝遺集』を筆者に譲渡した。

(24)「疾病家庭逐邪誦経法」に示された経文類の中に四十八将請、召九霊章、五行九曜章、沈痾痼疾章などがあげられている。ここ

には玉枢経の名はみえないが、これらは玉枢経の一部分であることが明らかなので、一応（玉枢経）として示した。

(25)「奇門遁甲」の法とは敵を倒すための兵法で、易と占星術を用いる方位術である。盲僧は鬼神を駆使する道術や隠身術を行う遁甲遁身に優れた神として、諸葛孔明を尊崇した。

(26) プクは直径三五～四〇センチの太鼓で両面を打つ。クェンガリは直径二五センチ位の真鍮製、たらい形で片面を打つ。ともに韓国の民俗及び巫俗の楽器である。

(27) 張徳順「国文学と巫俗」一〇～一四頁、（金東旭ほか共著『韓国の伝統思想と文学』成甲書房、一九八三年）。

(28)『朝鮮神歌遺篇』七九頁以下、郷土研究社、一九三〇年。

(29)「資料 帝釈本プリ」（『東亜文化』第九輯、一九七〇年）。

(30) 洪錫謨、姜在彦訳注『東国歳時記』六一頁（『朝鮮歳時記』東洋文庫一九三、平凡社、一九七一年）。

【資料】本文中の異体字は正字に直し、旧字体の一部は新字体に直して示した。

資料1　盲人読経・盲人集団の起源伝承

①A師（ソウル、大韓盲人易理学会員）

一四代宣祖王は壬辰倭乱の際、義州へ避難したが盲トシン・ギョンダル（申景達）が王を補弼した。国が平静を取り戻すと王は功労にむくいるため、ソウルの八人の盲人に盲人庁の設立と、衣冠の着用を許可した。（面談一九九六・四・八）

②A師（同前）

一七代孝宗王の第二王子、桂山大君は盲目であった。ある日「問数するよ」という声を聞き盲ト鞠鐘鎬を招き入れた。将棋・骨牌などを共にしながら健康を取り戻したことを喜び、王は盲庁を設立して同文校理の位階を授け、初代の堂主として盲庁を管掌させた。（同前）

③W師（慶南道馬山、大韓盲人易理学会員）

宣祖王の三男、桂山大君は盲目で、生気が見られなかった。他の盲人達と集いたいと言う桂山の希望を入れて、王はその施設を作った。そこで桂山は四人の盲人と読経を生業として生き生きと暮らした。これが盲人読経の始まりである。（面談一九九七・七・一二）

④崔順道（慶南道東莢郡、慶南盲人組合長）

英祖大王の兄は盲人であった。美妓や美味を楽しむことのない毎日であったが、ある日「問数」と叫びながら通る者が自分と同じ境遇の不具者であることを知った。その者を樓上に呼び、互いに不具の恨を話すうちに共鳴し、すぐに知己となった。彼は国兄の威力で京城内に御ト庁を設立した。そこでは七一人ずつの当番盲人を招いて豪奢な宮中生活をさせ、毎日盲人達と歓談・消日し、やっと生の慰安を得た。彼は盲人達を太師と呼ぶよう英祖に勅令を下させた。（孫晋泰「盲覡考」一九二九年）

⑤金宝貝（平壌、巫女）

時代や国は分からないが、巫女を憎み盲覡を好む王がいた。ある時、水なし井戸の中で人の声や笛太鼓の音がするので、これを止め

得た者に賞をつかわし、止め得ない者は死刑に処すとした。巫女は井戸の周囲を踊りながら祈ったが音は止まず、盲覡の読経で止んだ。これは王の策略で、盲覡は読経占卜の業が認められた。逃れた巫女の祈りにより王位についた郡守我王の計らいで、再び巫女は業につくことができた。（赤松智城・秋葉隆『朝鮮巫俗の研究』下巻一五頁、一九三八年）

⑥金庚鐘（江原道、経巫）

李朝のある王の時代、巫女と経巫のどちらの効験が優れているかを試すため、王は大きな穴を掘らせ、農楽集団を呼んで中で遊ばせた。巫女がクッを始めて一か月過ぎても音は消せなかったが、経匠（キョンヂェンイ）が読経すると音が止んだ。そこで経匠には免許制度を与えて各道に組合を作り運営させるようにした。これが江原道神庁会の由来である。（徐大錫「経巫攷」『韓国文化人類学』創刊号四九頁、一九六八年）

資料2　成造祝文

成造神은太極肇判之後에人類穴居之初는未有神道之崇이리니有巢構木之後에始有宮室之制하니生靈所寓에豈無護神가龜毛作棟하고兎角爲梁하야成造之神이於茲爲始니라上自王室로下及蔀屋히孰無成造리요人道即接에成造最靈이라內護竈王外護址神하와此家明堂에鎭壓諸魔하사니禜禳則驗이오禳祓則聽이라是以로今月今日에齋沐百拜하오니齋體雖微나虔誠可愍이러伏願大神은俯矜丹懇하야曲垂玄慈하사使此家中에金玉滿堂上下和睦能滅千災成就萬德螯賊不侵六畜蘩息人瞻壽岡歲登稼穡功高幽贊德深洪白願言尸祝載歌千春謹以清酌庶羞祇薦于神尚饗

成造歡喜経

成造成神成造歡喜、大世地穹成造歡喜、龍虎帝王成造歡喜、
三十三天成造歡喜、二十八宿成造歡喜、青土将軍成造歡喜、
赤土将軍成造歡喜、白土将軍成造歡喜、黒土将軍成造歡喜、
黄土将軍成造歡喜、東方天皇成造歡喜、南方天皇成造歡喜、
西方天皇成造歡喜、北方天皇成造歡喜、中央天皇成造歡喜、
年梵天皇成造歡喜、月梵天皇成造歡喜、日梵天皇成造歡喜、
時梵天皇成造歡喜、大梵天皇成造歡喜、子年子月子日子時、
立柱上梁成造歡喜、丑年丑月丑日丑時、立柱上梁成造歡喜、
寅年寅月寅日寅時、立柱上梁成造歡喜、卯年卯月卯日卯時、
立柱上梁成造歡喜、辰年辰月辰日辰時、立柱上梁成造歡喜、
巳年巳月巳日巳時、立柱上梁成造歡喜、午年午月午日午時、
立柱上梁成造歡喜、未年未月未日未時、立柱上梁成造歡喜、
申年申月申日申時、立柱上梁成造歡喜、酉年酉月酉日酉時、
立柱上梁成造歡喜、戌年戌月戌日戌時、立柱上梁成造歡喜、
亥年亥月亥日亥時、立柱上梁成造歡喜、成造任은與主同楽하사歡喜奉行하읍소서

資料3　成造神歌―家神由来歌―

忽然天地開闢の後、三皇五帝の其の時代に、

天皇氏初めて生れ木徳にて王となり、
日月星辰照臨せば、日と月とが明るけり。
地皇氏次に生れ土徳にて王となれば、
草と木とが生え出でたり。人皇氏更に生れ
兄弟九人が九州を分掌し、
人間を治める時、人世の文物を設けたり。
燧人氏後に生れ樹を鑽りて火を出だし、
人に火食を教へたり。有巣氏更に生れ
構木して巣となし、木の實を取り喰ふ時、
木を構えて家となし、雪や寒さを凌ぎたり。
軒轅氏後に生れ、高山の樹を伐りて、
三四隻の船を造り、萬頃滄波に浮ばせ置き、
億兆の蒼生を統攝し、罟を結び網を作りて、
魚捕ることを教へたり。神農氏續いて生れ
歴山の樹を伐りて、鋤と犂とを造り、
農事の法を教へ給ひ、百草を嘗めて薬を作り、
治病の事を授けたり。伏羲氏は聖君なり、
滄海の如き意見にて、河圖洛書を解き出だし、
日中に市を設け、萬物の賣買を教へ、
始めて八卦を劃して、陽を教ふるとき、
男子の娶妻法と、女子の出嫁法を、
禮に依りて説き教へ、夫婦の法を定めたり。
女媧氏又生れ五色の石を美しく磨き、
以て敷天したる後、女工の諸技を教へ、
男女の服制を設けたり。法主氏法を定め、
陶唐氏歴書を出し、春夏秋冬の四季節と、
冬藏秋収を教へたり。孔子さま出世して、
詩書百家三綱五倫、仁義禮智善惡班常（貴賤のこと）、
有識無識を教へたり、其の時其の時代の
成造の本はどこであらう、中原（しな）の國でもなく、
朝鮮の國でも無く、西天國こそ正本なり。
成造の父親は天宮大王、成造の母親は玉眞夫人、
成造の祖父は國盤王、成造の祖母は月明夫人。
成造の外祖父は淨飯大王に非ずや、成造の外祖母は摩耶夫人に非
ずや、
成造の室内夫人は桂花夫人にあらざるや。

資料4　成造プリ

（　）内は「成造神歌」によって補い、＜　＞内の数字は該当する段を示す。

（天地開闢、三皇五帝、九兄弟の治国）＜1＞

・昔、西天国にチョンビン王（天宮大王）とマヤ夫人（玉真夫人）が住んでいた＜2・3＞

・王は四〇（三七）歳、夫人は三九歳になるまで子供に恵まれなかった

・山神や竜王に祈りを捧げ、ついに身籠った

・世継ぎの誕生を喜び、国の安泰を願って安心国と命名＜4＞
・占い師が安心国の四柱をみて、妻を冷遇しインドの黄土島に三年間流刑となることを告げる＜5＞
・マヤ夫人は息子が生まれつき持っている悲運を嘆き悲しんだ。
「天も地もなんと無情なことよ、四十路にして身籠った息子だというのに、仏も薄情な…。我が子が妻となる女を疎んじ、流刑にまでなるとはとうてい信じられない」
（安心国一五歳の時地下国に下り、玉皇上帝からもらった木の種を蒔く）＜6・7＞
・安心国一五（一八）歳の時、ケファと結婚したが、占いの通り妻の事はそっちのけで冷遇した＜8＞
・しばらく耐えていたケファは三年後に王に直訴した
（酒と女に溺れ、放蕩三昧の成造を諫臣たちが非難し、王に報告した）＜9＞
・王は三年の流刑に該当するとして、占いの通り島流しを命じる
・三年分の衣服と食料を船に積み無人島である黄土島へ流され、たった一人で過ごす＜10＞
・無人島で過ごす間、故国は困難に直面し、三年を過ぎても彼を連れ戻すことがかなわなかった。衣服も食物もなくなり、安心国は次第に野性化して獣のようになった
（安心国は衣を引き裂き、自分の血で手紙を書き、ケファに届けてくれるよう青い鳥に頼んだ）＜11＞
・ケファは夫の事を気に病み、三月のある夜、次のような詩をうたった。
「鳥よ鳥よ、青い鳥よ、お前はたとえ獣でも、世界をすみからすみへと渡っていく途中、もし黄土島へ行ったなら、夫が生きているのか、それともも亡くなられたのか、教えておくれ」
・青い鳥はこのメッセージを悟り、安心国に伝えた
・安心国はぼろぼろの衣服をさいて自分の血で手紙を書き、妻に今の自分の獣のような暮らしを伝えた
・これを聞いて心を痛めた王は部下に衣食を託し、安心国を迎えにやった＜12＞
・安心国はこのことを有り難く思い、ケファにも感謝し、自らを振り返り今後は国の忠義、父母への孝行、夫婦和合の必要性を悟った
（安心国は帰国し、一〇人の子に恵まれる）
・王に頼んでしばらくの間黄土島に家を建てて住んだが、のちに故国へ戻り民が平安に暮らせる国造りに励んだ
（安心国は一〇人の子を従えて地下国に下り、大きく成長した木で家を建てた）＜13＞
・安心国はこうして成造神となった

【付記】

本稿は一九九八年三月の日本口承文藝学会研究例会で発表した草稿をもとに加筆したものである。当日、福田晃先生を始め、ご教示を頂いた諸先生に感謝申し上げたい。本稿の論拠として使用した韓

国盲僧についての資料の一部は、一九九五年より二年間、財団法人トヨタ財団研究助成により可能となった調査から得ている。調査の成果はすでに「盲僧集団に関する国際共同研究――日韓比較を通して儀礼・伝承文化の共通性と差異を探る」と題した報告書を提出済みである。

（ながい・あきこ／福岡女子大学）